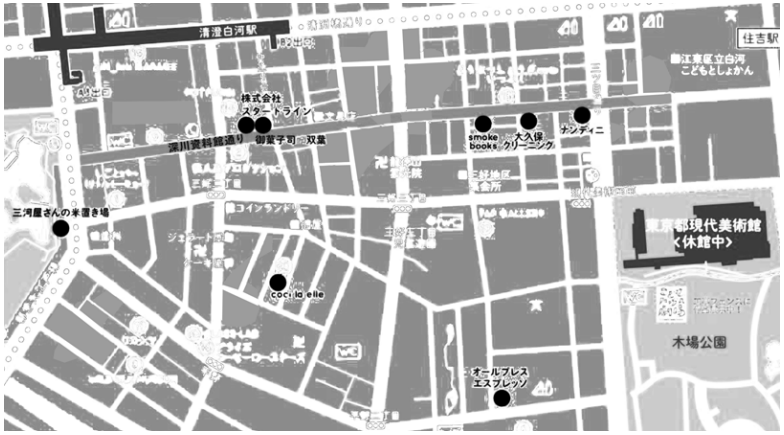
Inverse Perspective
反転する視点
2017
アクト / ドローイング・インスタレーション
(ガラスに顔料マーカー)
『MOTサテライト むすぶ風景』展
東京都現代美術館(東京・深川)

まちの観察や人々との交流で得たインスピレーションを自身の経験と結び、その思考の地図をまちに開かれた窓に展開していくプロジェクト。東京にゆかりもなく、国外に移り住んで生活している自分が、清澄白河で学び、働き、暮らしている海外にルーツを持つ人々を「案内役・媒介者」としてまちを考察。新旧、内外のものが入り交じる古い下町での日々の営みに現れる線の引き方・越え方の中に地域特有の価値観を見出すよう試みた。



(上) 清澄白河界隈の地図、およびドローイング制作箇所
(下) クリーニング屋の窓に描かれた「思考の地図」

東京の下町、深川。気取らぬ雰囲気をとどめつつ、古くからの寺社や木造家屋の風景にタワーマンションやカフェ、ギャラリーが入り交じってゆく。この常に変わりゆくまちに1995年開館した東京都現代美術館による、地域とのつながりに焦点を当てた『MOTサテライト』のための作品。

「よそ者」視点からの都市風景の観察と地元との交流を、そこではないどこかでの日常体験に照らしながら、まちの窓に「思考の地図」を鏡文字で描き、さまざまな社会における「線の引き方・越え方」と価値観について問いかけた。

寛容と越境
代々続く根生の職人、タワーマンションに住む核家族、伝統的な情緒を新鮮に楽しむ若者、古い店舗を刷新して利用する外国人—多様な建物と住民が共存する。心地よいお節介や路地園芸など、何気ない「越境」に至るところで出会う。流れを受け入れ、垣根が低い、というまち独自の気質の現れなのか。

「地元のよそ者」のまなざし
日本人で国外への移住者、母国の首都に縁もなく不案内な私の「よそ者」という立場。その矛盾するかのような視点には、内と外、自生と外来、古きと新しきなどの観念への疑問が浮かぶ。制作と展示に先駆けて行なった、まちのリサーチでは、界隈に学び、働き、暮らす、海外にルーツを持つ人々から地元の案内、仲介者としての協力を得た。

思考の流れ、介入する鏡
まちとの対話のなかで醸成された「思考の地図」は、点在する窓に有機的に拡がっていった。言葉の図解を内から鏡文字で描き、外から見えるように考えるというアクトを通して、その現場でも人々の思考や関係性に介入しようと試みた。描く窓の内外に居合わせた人々との愉快で潤いのあるやりとりの中で、思考の地図は展開した。

地元の人が親しみ、駅から美術館への道でもある商店街を中心に、言及する題材と関連のある場所の窓に制作。点在する「思考の地図」は互いに一部重なり、その流れにより全体が一つの大きな織物になるように構成した:
世襲と伝統(和菓子屋)残るもの、消えるもの(米屋倉庫)職人技と共有(クリーニング屋)見えなくするもの(古本屋)周縁への視線(作傘工房)住習慣、越境と再開発(不動産屋)グローバリゼーションと帰属意識(カフェ)移動する文化、地元と民族コミュニティ(インド料理屋)

（左上）近年取り壊し予定の長屋にある
米屋の倉庫の窓
（右上）タワーマンション横にあるインド料理屋の窓
（左下から右下へ）小さな路地にある傘屋の窓
開業してまもない不動産屋の入口ドア
商店街に昔からある和菓子屋の自動ドア
通りに面した作業台のあるクリーニング店の窓
古本屋のショーウィンドーでのドローイング・アクト
カフェの焙煎室と店内を区切るガラス壁

Inverse Perspective
反転する視点
2017
アクト / ドローイング・インスタレーション
（ガラスに顔料マーカー）
『MOTサテライト むすぶ風景』展
東京都現代美術館（東京・深川）